優秀賞
僕が見た温かな光景
県立戸田翔陽高校　１年
吉井　新

　母の職場に立ち寄った時のことです。母の職場は輸入食品を販売しているお店なのですが杖をついた五十代くらいの女性が店員さんに何か聞きながら買い物をしていました。その女性と店員さんの距離感が近いなと思って近付いてみると、目が見えないようでした。店員さんは慣れた様子でその女性の横に付き添い、要望の商品を買い物カゴに入れていました。会計の列にも一緒に並び、レジの前に行くとレジの店員さんが笑顔でカゴを受け取り、商品をレジに通して金額を告げます。目が見えないようだけれど支払いはどうするのかと思ったら、お財布をバッグからサッと出してレジで広げて
「お金取ってもらえる？」
と言いました。レジの店員さんは
「〇〇〇円をお取り致しますね。」
と言って女性のお財布から丁寧な感じでお金を取って間違いがないように確認していました。レジにお金を入れて、お釣りは
「〇〇円のお返しとレシートです。お釣りはお財布に入れますね。」
と言ってお財布に入れていました。その女性もいつものことなのか
「ここに入れちゃってね。」
と言っていました。
　その後も出口まで店員さんが女性の手を取って誘導していました。
　僕はこのことが気になったので母に尋ねてみました。この女性はお店の常連さんで目が不自由なこと。目が不自由だけれどいつも楽しそうに買い物をして明るく話しかけてくれること。僕が見たのはいつもの光景だったこと、などを教えてくれました。母はお店を気に入ってくれていつも買い物に来てくれるのが嬉しいと言いました。
　このことはその女性とお店の店員さんとの信頼関係がないとできないことだと思いました。自分のお財布を開けてお金を取って欲しいと言えるのは相手を信頼している証拠です。自分の欲しい商品を取ってくれてカゴに入れてくれる。レジの列に一緒に並んでくれる。お財布にお釣りを入れてくれる。帰る時まで手を取って誘導してくれる。これらのことがなければその女性は買い物に来ないと思います。常連さんだと聞いて、買い物をしやすいからなのだと思いました。
　僕は自分が目が不自由だったら、と想像してみました。
　まず外に出るのは不安の連続です。転んだり事故に遭わないか。目的地までいけるのか。目的地で目的（買い物や用事）を達成できるのか。誰か手助けしてくれる人はいるのか。自分から話しかけて質問したりお願いをしたりできるのか。少し考えただけでも不安なことだらけです。
　その逆も想像してみました。自分が目の不自由な人を見かけたら。お店だったら目的の物を取ってあげることはできます。目的地までの行き方を聞かれたら。近くの場所だったら一緒に行くことはできますが、自分が行くことが出来ない場合は？視覚障害者用誘導ブロックを使ったりして駅ま

で行ったり、バスに乗ったりすることができるのでとても大事なのだなと思いました。実はこの名前も今回初めて正式名称を知りました。

　母の職場に買い物に来た目の不自由な女性も視覚障害者用誘導ブロックがあるからお店に来れて、帰れるようでした。いつも視覚障害者用誘導ブロックまで女性を見送るそうです。

　障害のある人とない人との関わりはこういった環境の整備がなくてはならないものなのだと気付きました。思いやりや親切心だけでは成り立ちません。僕が見た温かな光景が日常になるために自分には何ができるのか。相手の立場になって考えてみたり、自分がその立場になった時のことを想像してみたり、とても良い機会になりました。自分にはそういう関わりがあまりないな、と思っていましたが気付いてなかったり、目を向けていなかったのかも知れません。僕が見かけたあの女性のように、楽しそうに買い物をしたり会話をしたりできる社会になって欲しいと思いました。